我が職場の小さな安全活動

付知営林署　倉畑守邦
高野勝治

1. はじめに

「安全第一」の言葉も、職場の中に定着して久しく、労働災害防止上から複雑な自然条件に対応すべく幾多の安全対策、安全指導が計画実行され、災害要因の除去に努力してきた。しかし、災害は相変わらず多発しているところから、安全活動に費やす時間と経費を考えるとき、今日までの安全に対する取り組みが万全であったのか。一つの疑念をいだかずにはいられない。

付知営林署では、こうした実態をふまえ昭和50年度の安全活動を立案するに際し、広く各職場から意見を求め、「災害は、小さな芽のうちに摘みとる運動」の提案を受け、安全活動方針に新しい変化を加えた。

具体的実施内容としては、「300事故の摘出通報」である。

災害は、日頃、作業の中に起きている小さな事故（300事故）のどこかに潜んでいる。これを事前に洗い出すことにより災害の未然防止を探求するものである。

2. 具体的な取り組み

(1) 安全衛生委員会

ア　過去の安全活動の反省。

イ　書きやすい300事故通報カードの募集と作成。

ウ　摘出事故の集計と分析、及び特殊事故の原因究明と対策ならびに指導。

エ　営林署出張者による現場安全活動の参加と指導。

(2) 現場の取り組み

ア　過去の職場安全活動の反省。

イ　300事故運動の討論と目標の設定。

ウ　300事故摘出と分析結果の活用。

エ　職場安全会議の充実と安全作業の職場定着

3. 東股担当区の取り組み

(1) 安全目標と職場安全会議

安全衛生委員会の方針を受け、職場では、「300事故摘出で、安全の先き取りを」をテーマとし

て職場安全会議を開催し、

ア　過去の反省

指導受身的安全活動のまんねり化と過去の300事故摘出不成績に対する問題点の整理と反省の中から、書きやすい通報カードの提案。

イ　欠かせない職場の安全活動と目標

主任、安全推進委員の参加を含めながら話し合いを重ね、きびしい自然条件下で明るく造林作業を行うためには、「安全は欠くことの出来ない重要事項」であると一致し、300事故摘出に向け、

(ア)　安全は、自から求め自から守る事を自覚する。

(イ)　今日の事故は仲間に語り、注意を喚気する。

(ウ)　話した内容は300事故カードに記入する。

(エ)　安全当番は摘出に当り音頭をとる。

(オ)　仲間の不安全行為を目撃したら気軽に指摘し合える職場づくり。

こうして、昭和50年度の安全活動の出発にあたり、「300事故摘出の目的とその必要性を全員で確認」した。

(2)　活動の結果と問題打開

一日の作業から摘出された事故内容と安全衛生委員会を通じ現場に知らされる300事故分析結果は、職場安全会議の主要議題となった。

また、分析内容は今迄気付かなかった危険データを示し、摘出→分析のくり返しは職場の中に安全に対する新しい活路を開眼させた。

ア　他の職場の事故内容に関心を持つようになった。

イ　他署の災害事例を作業地にあてはめ議論し、対策を考えるようになった。

しかし、2年、3年を経過する間には作業中、同じ様な300事故は数多く発生、数に対する慣れと、同じ事を職場の話題にするマンネリから摘出低下現象がおこり、摘出「0」の月が1～2か月も続くことがあった。こうした場合も、主任のアドバイスのもとに職場安全会議を足場に話し合い、摘出には次の事項を目安とした。

(ア)　怪我のない300事故でも、一つ誤れば大災害の要因を含んだ出来事。

(イ)　日頃と変わった出来事。

(ウ)　繰り返し発生する危険データの出来事。

(エ)　痛い目に合ったり、小さな怪我をした出来事。

(オ)　仲間の不安全事故に気付いた事。

4. 300事故の分析

50年4月から始めた摘出活動も、3年余り、53年12月末まで署全体の摘出は386件、うち造林作業中における摘出は253件（東股担当区109件）であった。

全般的に何らかの傷をした小災害事故（29事故）が多い傾向を示したが、造林関係を中心とした分析結果は次のとおりとなった。

(1) 休日後の発生割合

休日明けの1～2日目と中日の4日目に多く（図－3）それぞれ26%、20%、21%の割合で発生している。

(2) 時間帯別の発生割合

午前10～11時と午後2～3時を頂点とする2段分布を示し、これを最近5か年（昭和48～52年）の局管内造林関係公務災害の発生率と比較すると（図－4）同じカーブを描き、共に逆W型を示した。

(3) 傷害部位別割合

300事故は、身体のどの部位に対し多いかをみると、図－5から頭、顔部の28%を最高として、掌腕部、脚部が各々25%となり、これを5か年の局管内造林公務災害と比較すると、若干脚部に災害の比率が高い傾向を示しながら全体的に各部位共に、同じ様な発生率であった。

(4) 原因別発生割合

転ぶ、傷害物、道具等原因別発生割合をみると、製品その他の事故は平均的に発生しているのに対し、造林では、踏みはずし、スリップが原因の転ぶ事故が44%（図－6）と多く、細別では、転倒、枝などのはね返りが多く、道具関係では、鉈、刈払機が多い。

(5) どんな傷害が多いか。

300事故は、怪我のない事が多いはずだが、摘出結果は、何らかの傷害があったものが全体の65%に達し、打撲、打身、擦傷、刺傷、切傷の順で発生していた。

5. 300事故分析による考察（造林関係）

我々が300事故の摘出に参加し、その分析を行った結果、次の点を学びとった。

(1) 休日は、明日からの仕事に備え十分な休養を取り、労働の中間日は気分的な疲労度も加わるため、より安全作業に注意しなければならない。

(2) 災害は、300事故と類似した時間帯あるいは、身体の部位に多く発生している。午前と午後の中間の時間帯に、頭顔部、掌、脚部に多いことに留意する。

(3) 足場の悪い場所で、刃物を使う仕事は常に災害の要因をかかえていることを念頭におき働く事。

6. ま　と　め

300 事故の摘出と分析結果の活用は職場に次の成果をもたらした。

(1) 営林署全体として

ア　身近な事故の取り扱いから、職場の安全意識が高まった。

イ　分析結果により、災害要因を知り、安全作業に撤した。

ウ　300 事故摘出の定着とともに、災害件数が激減した。（図－1）

(2) 東股担当区の成果

ア　1 人が事故体験を語る事により、全員が身をもって感じとり、注意喚気となった。

イ　300 事故分析結果から、災害の芽を知り、災害の未然防止につとめた。

ウ　誰もが気軽に話す職場となり、職場安全会議が充実し、かつ仲間の信頼と職場の活力が増した。

エ　現場と主任、営林署のパイプが良くなった。

オ　300 事故摘出にとりかかって以来無災害を記録した。

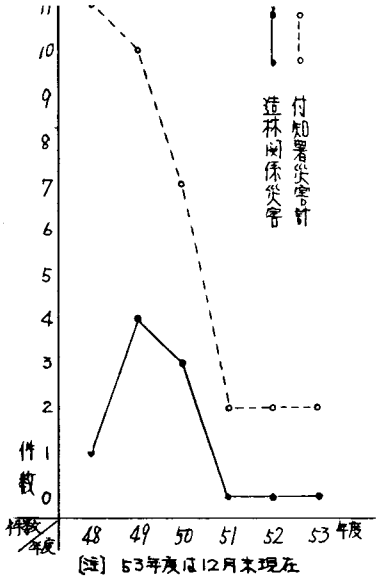
カ　無災害と会話の充実は、造林事業の効率的作業の潤滑油となった。

7. お　わ　り　に

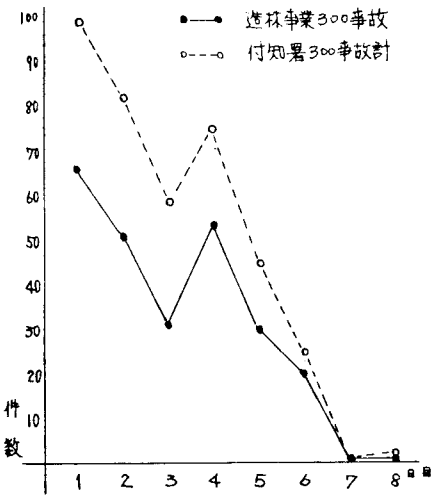
職場の安全を守る目的達成から見た 300 事故の摘出は、数多くの安全対策から見れば、小さな活動にすぎない。しかし、1 人ひとりの意識の盛り上りは、個人の安全、グループの安全の大勢を左右する大きな力の基礎的要因であることを、この 3 年余りの 300 事故摘出運動の中から知る事が出来た。

安全は、1 人ひとりの心の中に宿る、我々は、今後も、「安全第一」を旗印に、自から求めた安全活動に励み、家庭の幸せと、作業のより生産性向上を目指し努力したい。

図－1　年度別災害発生件数



図－3　休日後の発生割合



図－2　皆んなの意見からできた通報カード

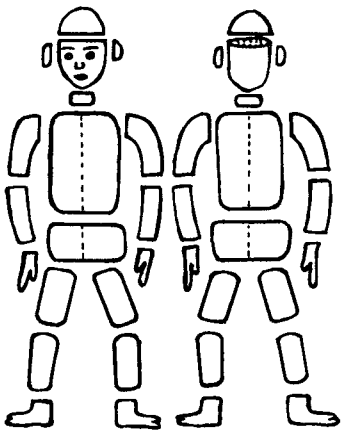
300事故通報カード

―――― みんなで調べよう　ハットした事故 ――――

課長、主任確認印	

月　日 月火水木金土日曜日（該当を○印）	時刻（　時　分頃） 休日後　　日	天候	晴、くもり、小雨 強雨、強風、台風 小雪、吹雪 （該当を○印）	事故者	男　女（該当を○印） 才

作業内容		場所	地形（該当を○印）	車道、歩道、伐跡地、伐採地、盤台 土場、造林地、天然林地、室内
			傾斜（該当を○印）	急、　ゆるやか、　たいら

ハットしたこと（番号を○印）		どの部分を　（×印）	どうした（番号を○印）
1 転　倒	11 穴　堀		1 どうもしなかった
2 転　落	12 薬　散		2 切　り　傷
3 落　石	13 ま む し		3 す　り　傷
4 落　木	14 蜂		4 刺　傷
5 笹木の跳返	15 燃　料		5 打　ぼ　く
6 鉈	16 踏 ぬ き		6 ね　ん　ざ
7 鋸	17 踏はずし		7 や　け　ど
8 鎌	18 スリップ		8 う　ち　み
9 刈　払機	19 衝　突		9
10 チエンソー	20 追　突		どんな時（番号を○印）
	21		1 本作業時
			2 準備作業時
			3 歩　行　時
			4 通　勤　時
			5 休　憩（息）
			6

※支障がなかったら該当の番号を○で囲んで下さい。

1 食べすぎ、のみすぎによる体の不調　4 疲労していた　7

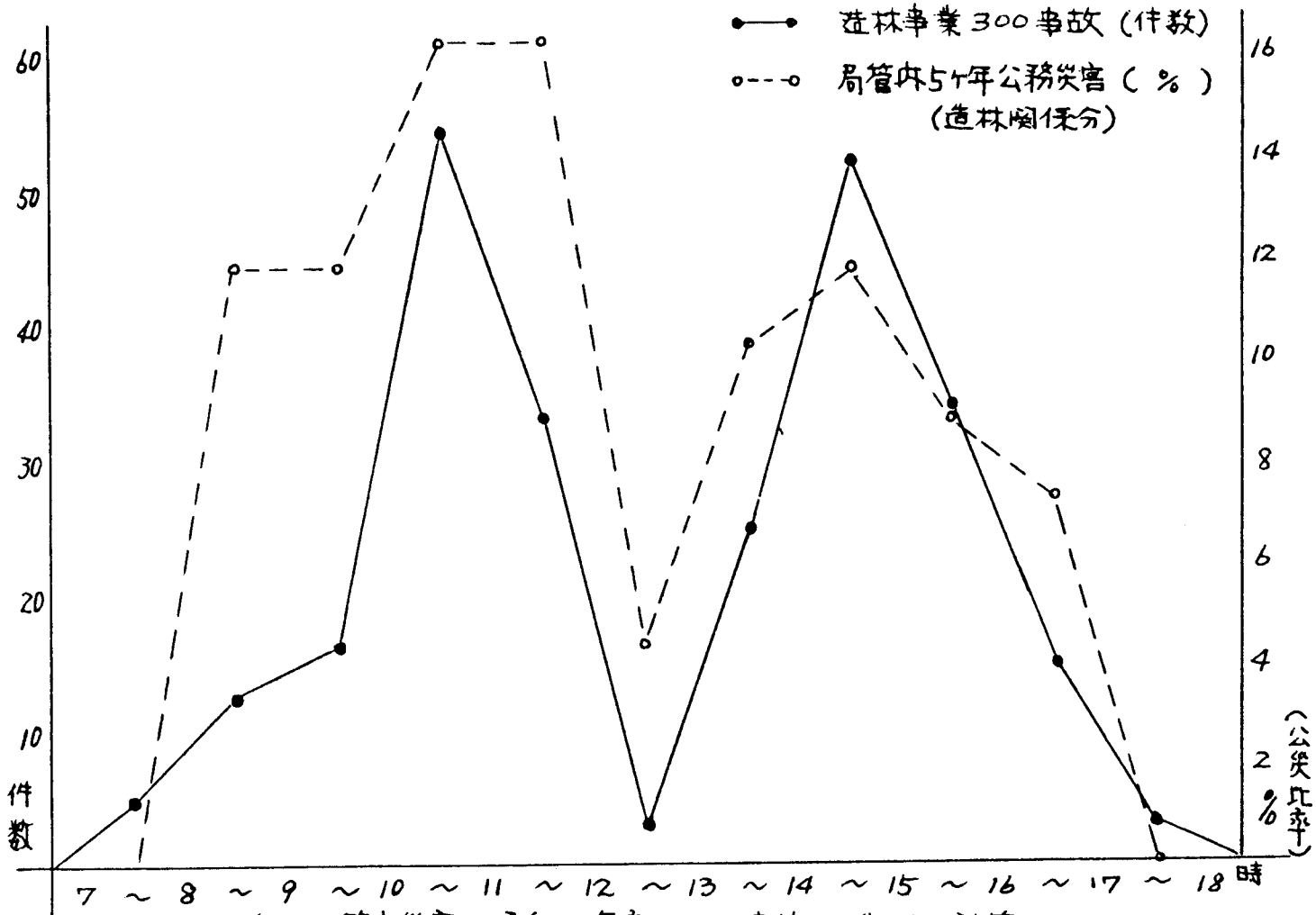
2 家庭上の心配ごとがあった　5 不平、不満

3 同僚との不和　6 睡眠不足

備　考

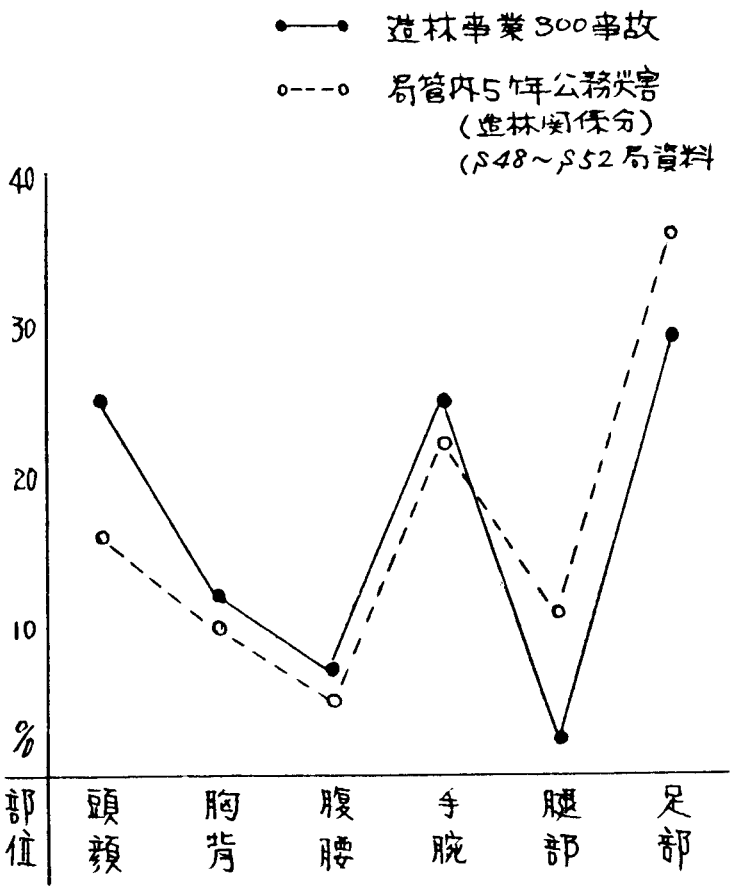
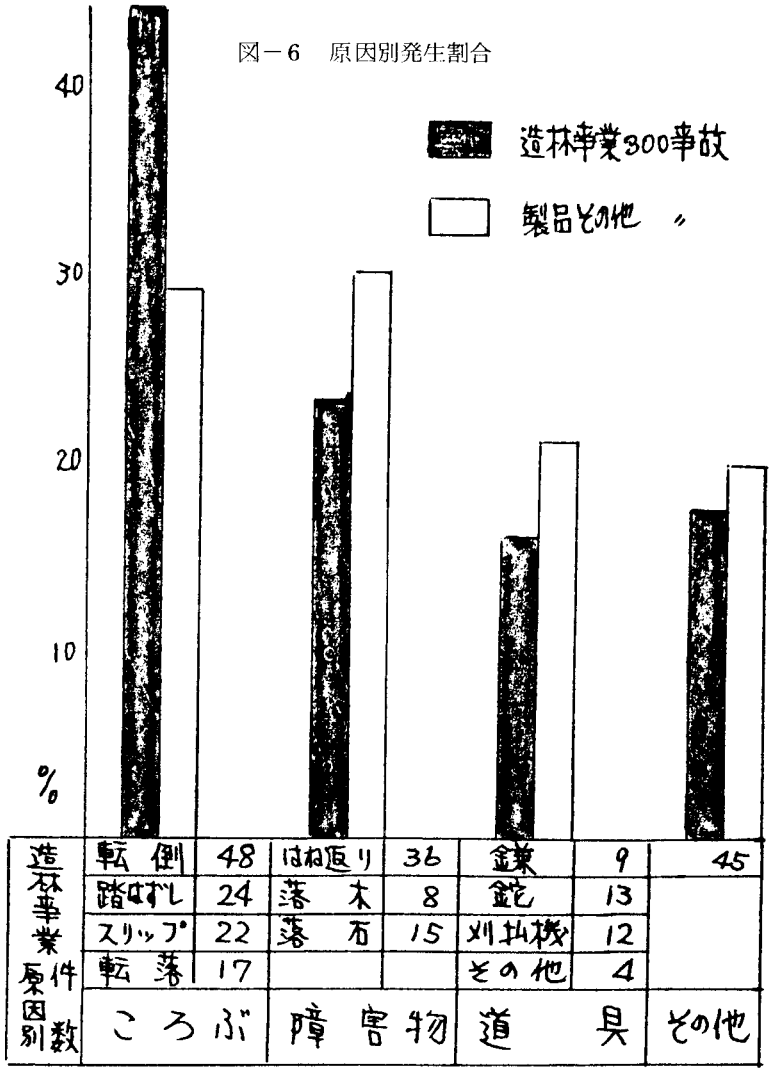
（註）その都度所属主任（署は所属課長）に提出する。

図－4　時間別発生割合（公務災害、300事故比較図）



〔注〕局管内災害の昭和50年度ミーバス事故を1件として計算。

図－5　傷害部位別公務災害、300事故比較図



図－6　原因別発生割合